

その店とはある雑貨ビルの中にあった。

店の名前は『わんちゃん喫茶』

様々な種類の動物たちとふれあう喫茶店というのがコンセプトだ。

ただし、その動物たちというのは……

「いらっしやいませ〜、がおおーん」

「おっ、ライライ。いつも元気だな」

店の入り口をくぐった俺こと柊木翔汰（ひいらぎしょうた）を迎えてくれたのはライオンのライライくんだ。

もちろん、本物のライオンが日本語をしゃべるわけがない。

ライライくんはライオンのコスプレをした男の子。

年齢は十二歳だったはず。

少し色黒だが間違いなく日本人だろう。

引き締まった肉体をしている一方、おちんちんはまだお子様で皮かぶりだし毛も生えていない。

なぜそんなことが分かるかって？ 丸見えだからだよ。

ライライくんが身につけているのは、ライオン耳のカチューシャとライオンの尻尾のみ。

ようするにほとんど全裸だ。

ちなみに尻尾は尻の穴からはえている。初めて見る人間なら分からないかもしれないが、この店の『動物』たちのアナルには、つねにディルドが突き刺さっており、それぞれの尻尾がついているの

だ。

ここまでで分かっただろう。

この『わんちゃん喫茶』は動物のコスプレをしたシヨタっ子と俺のような重度なシヨタコン達がいわゆるオタノシミをするための場所なのだ。

「オイラ、ずーっと元気だおーん。今日は受付係だから一緒に遊べなくて残念だおーん」

(中略)

「だ、だめ……」

「どうして？」

「だって、そこ、おちんちん」

「そうだよ。コロくんのかわいいおちんちんだ」

「汚いよ」

「なんで？」

「オシッコでるところだもん」

うん。

そうだよね。

ここはオシッコが出るところ。

まだ、他の液体がでたことはないだろう。

「コロくんの体はどこもきれいだよ。おちんちんも、おしっこも」
俺はそういって、コロくんのおちんちんを口に含む。

小さなオチンチンは、俺の口の中に完璧に治まってしまう。

「コロくんのおちんちん、おいしいな」

「や、食べないで」

（中略）

まずは、彼のコスプレ衣装を剥いでいく。

といっても、カチューシャと尻尾だけだが。

カチューシャは簡単に取れるが、尻尾はそうもいかない。

なにしろ、コロくんのアナルに差し込まれたデイルドをぬくって
ことだからな。

俺が尻尾を引っ張ると、コロくんが悲鳴を上げる。

「きゃんっ！」

「力を抜いて。尻尾を取ってあげるから」

「う、うん……」

ゆっくりとお尻から抜くと……

「マジか」

俺は思わずつぶやいた。

尻尾のさきについているデイルドは、直径3cm、長さは10cm
もある。

他のショタ動物たちのデイルドと同じ物だが、五歳児にはいかに
も太くて長い。

「おっきいのが入っていたね」

「お兄ちゃんと練習したから……」

（後略）